天上界から降りてきたブドウ蔓



佐賀　彩美（さが　あやみ）
アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

自然界の秋の恵みといえば、まずヤマブドウが思い浮かびます。ヤマブドウは天上界から降りてきたカムイ（kamuy－神）とされています。アイヌ語ではヤマブドウはハッ（hat）、ブドウ蔓はハップンカㇽ（hat－ヤマブドウ punkar－蔓）です。利用法は実を食するだけでなく、多岐にわたっています。食に関するものでは、発酵させて果実酒にするのはもちろんのこと、実だけではなく葉・ハッハムフ（hat－ヤマブドウ ham（－uhu）－葉）もブドウ蔓の芽・ハッレキヒ（hat－ヤマブドウ rek（－i－hi）－髭）も酸味があるので絞った汁を調味料として使ったり、イワナやヤマベなどの焼き魚や肉を、ブドウの葉のお皿に盛り付けたりしました。調理された食材の熱で葉からはブドウの香が立ち上ります。高級料亭でやっていそうなブドウの葉の利用法です。ブドウ蔓もさまざまに活用されていました。ブドウ蔓の外皮は固いので、外側の皮がめくれてくる春先に、内側の皮をブドウのために１枚だけ残して採取します。植物を採取する場合にも、植物の保護や自らのために一部残すのがアイヌの人々が守ってきた約束ごとです。

また、落葉樹に絡む蔓は切らず、常緑樹に絡む蔓は切ってもよいというきまりもありました。落葉樹の蔓の実は甘いので、人間以外の生き物が利用できるようになるべく残し、人間は常緑樹の蔓を切って使いました。人間が自然を自分たちに都合のよいように使ってもよい、という考え方からはこのような配慮は生まれないでしょう。

ヤマブドウの皮は細かく裂いて、草履を作ったり縄をなったりしました。ブドウ蔓で作った草履は、水を吸収しにくく滑り止めになるので、苔で滑りやすい河原歩きにも使われました。また、山中で大雪に遇った場合には、ブドウ蔓でかんじきを作って無事に家に戻ることもできました。ブドウ蔓を編んで作る縄・ストゥカㇷ゚ㇽキカ（sutukap－ブドウヅルの内皮 harkika－縄）も大変丈夫で、家を建てる際、建材の結束として利用されました。ブドウ蔓は、火にあぶって柔らかくして使いますが、冷えると非常に硬くなるため、建築素材として最適でした。

ヤマブドウの茎や皮は煎じて薬としても用いられました。皮には抗酸化物質が含まれているという研究結果もあります。ブドウ蔓を材料とするイヤリング・ニンカリ（ninkari－耳輪）もありました。正装時には、耳に大きな金属製のイヤリングをしますが、この金属製のイヤリングは大陸から物々交換で得た貴重なものなので、普段にはせず、穴が塞がらないようにブドウ蔓のイヤリングをしていました。ブドウ蔓のカムイ（神）に守ってもらうという意味もあったのかもしれません。イヤリングをするのは縄文時代早期からの風習とされ、世界各地でもみられます。アイヌの女性だけでなく男性も小さめのイヤリングをしました。イヤリングをするための穴は、まず針で耳に穴をあけて布を通し、布に油を塗ります。傷の治りを早めるという熊の油がベストです。この作業は赤ちゃんのときにするのですが、塞がらないように糸か細い布を通しておき、子どもが少し大きくなるとハルニレの樹皮から作った赤い布を下げておきました。

秋の恵みにはヤマブドウのほかに、ノブドウもあります。実が白いうちは甘い汁がありますが、色が変わるにつれ中身がスカスカになり食用には適しません。しかしヤマブドウと同じく、蔓を縄の材料として使うことができ、さらに煎じた汁で体を洗ったり、蔓をまとめてお風呂に入れたりすると神経痛やリューマチによく効くそうです。

ブドウだけでもこのように多種多様の利用方法があり、アイヌ民族の自然についての深い洞察力や知恵には驚くほかありません。

＊本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村　久和　氏　（1940-2025）　元北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリィマン社、2019年）、『平成20～令和６年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。